

没後 50 年

謎の失踪劇を起こした
ミステリーの女王

アガサ・ クリスティー

前編



Photo by Angus McBean © The National Portrait Gallery, London



© Laura H.

アガサが生まれた海辺のリゾート地、トーキー。デビュー作「スタイルズ荘の怪事件」を執筆したムーアランド・ホテルは今も健在。

手がかりゼロの難事件が、絡まった糸をほどこうにその全容をあらわにしていき、やがて複数の登場人物が、誰も何らかの殺意となりうる動機を持つていることに気づかされる――。

どんでん返しに次ぐ大どんでん返しで、最後の最後に容疑者を前にして明かされる謎解きに、胸のつかえが取れたような解放感を味わえるアガサ・クリスティーの小説。アガサは半世紀以上におよぶ執筆活動の中で、66の

史上最高ベストセラー作家

■英国生まれの名探偵といえば、まず誰もが思い浮かべるのは作家コナン・ドイルが生み出した「シャーロック・ホームズ」だろう。だが、ほかに世界的に高い人気を誇る名探偵がいる。そのうちの一人、エルキュール・ポアロやミス・マープルを誕生させたのが、「ミステリーの女王」と呼ばれる作家アガサ・クリスティーだ。彼女の著書は100カ国語以上の言語に翻訳され、聖書とシェイクスピアに次いで読まれているという。今年はこの「世紀の大家作家」の没後50年、まもなく大英図書館でエキシビションも開催される。今回は、アガサの人生を前後編に分けてたどってみたい。

長編のほか、短編、戯曲、さらにメアリ・ウエストマコット名義によるロマンス小説を書き上げ、ギネスブックでも「史上最高のベストセラー作家」に認定されている。彼女の作品を読んだことがなくとも、孤島のホテルに集められた人々が次々と姿を消していく「そして誰もいなくなった」(Ten Little Niggers)、「超豪華特急という動く密室の中で起る殺人事件」「オリエンタル急行の殺人」(Murder on the Orient Express)など、ドラマや映画、舞台など、何らかの形で作品に触れたことのある人が多いはずだ。

断念した音楽家への道

アガサは実業家である米国人の父とアイルランド人の母の第3子として、1890年9月15日、イングランド南西部デボンの湾に開かれた町トーキー(Torquay)にて誕生。トーキーは、ペイントン(Paignton)、ブリックサム(Brixham)と合わせて「イングランドのリヴィエラ」(フランスからイタリ

アにかけて広がる地中海沿岸地方のリゾート地)と呼ばれ、19世紀から高級保養地として発展してきた場所だ。アガサは、そこで裕福な家庭の娘として育った。

姉や兄と10歳ほど年齢が離れていた末っ子のアガサは、寄宿学校で学ぶ

子ども時代のアガサ・クリスティー。1977年発行の著書より (Dodd, Mead Publishing House, 1977) © Cockerjark



姉や英軍に入隊した兄と顔を合わせる機会は少なく、またトーキーに同年代の子どものほとんどいなかったため、ペットとともに「想像上の友人」と遊ぶことが多かった。母親は子ども2人を育てた経験からか、「学校教育は脳や目をダメにする」と信じており(兄は寄宿学校を中退して英軍に入隊した)、アガサには学校へ通わせず、自宅で教育を受けさせた。

11歳の時に父親が病死。その翌年には姉が嫁ぎ、兄は海外駐留が決定、家族の距離はますます遠くなった。母親はアガサに物を書くことをすすめ、この頃から詩や短編小説を書きはじめている。また、姉が大好きだったコナン・ドイルの著作「シャーロック・ホームズ」シリーズに熱中し、近所に住む作家のもとを度々訪れては、読書や執筆の指導を仰ぐようにもなった。しかし、娘をオペラ歌手かピアニス

トにしたかった母親は、アガサが16歳になると、パリの教養学校に進学させる。母の期待に応えるため音楽を学び、ピアノの練習に懸命に励んだものの、元来の内向的な性格により「舞台に立って人前で演奏する」ことに耐えかね、音楽家としての道は諦めざるを得なかった。

「毒薬」との出会い

パリに渡ってから2年後、教養学校を卒業。結婚適齢期を迎えていたアガサは、故郷へ戻って「婚活」に励み、軍人のレジー・ルーシー少佐と婚約した。ところがアガサは、舞踏会で知り合ったアーチボルド・クリスティー大尉と恋に落ちてしまう。「運命の出会い」からわずか3カ月後、アーチー(アーチボルドのニックネーム)からプロポーズされた彼女は快諾し、レジーとの婚約を破棄。2年の婚約期間を経て1914年、第一次世界大戦が勃発して間もないクリスマス・イブに結婚した。アガサは24歳、アーチーは25歳だった。

新婚生活を楽しむ時間はほとんどなく、アーチーは出征。アガサはトーキーの赤十字病院で、無償の看護婦として勤めはじめる。知的で人目をひく赤毛のアガサは、医者や患者から人気があり、やがて薬剤師の助手として薬局勤務に昇進するが、ここでの経験が「毒薬の知識」という、ミステリー作家としてかけがえのない財産をアガサに与えることになった。

さらに、ひよんなことから始まった、姉との「簡単には結末が予測できない探偵小説が書けるかどうか」という競い合いが、アガサの作家としての才能を開花させることとなる。この挑戦に奮起した彼女は、自宅を離れてホテルに3週間こもり、執筆に専念。トーキーに似た町を舞台に、病院で出会ったベルギーからの避難民をモデルにして、かの名探偵ポアロを創出、奇怪な殺人事件を完結させた。こうし

て、「ホームズとワトソン博士」に匹敵する「ポアロとその相棒ヘイスティングス」を生み出したわけだが、原稿を送った出版社から良い返事はなかなかもらえず、ようやく出版にこぎつけたのは7社目。これが彼女の記念すべきデビュー作「スタイルズ荘の怪事件」(The Mysterious Affair At Styles) (1920年)である。完成から4年の歳月が経っていた。

デビュー作が出版される前年の1919年には、一人娘のロザリンドを出産。その後も次々と新作を発表し、瞬く間に人気作家への階段をかけたのぼったアガサは、1924年にロンドンで開幕した「大英帝国博覧会」(British Empire Exhibition)の広報チームの一員として、世界中をまわるまでになった。

だが、結婚、出産、作家としての成功——と順風満帆に見えた日々は長くは続かなかった。博覧会のための世界巡業には夫も同行していたが、この縁がもたらした「ある騒動」によって、アガサは小説を地で行くような「謎の失踪事件」を起こすのである——。(次号へ続く)



第一次世界大戦中、故郷トーキーの病院で看護師をしていた頃のアガサ。この経験が、殺人事件で頻繁に登場する「毒薬」の知識をもたらすことになった。© The Christie Archive Trust (Agatha Christie: A World of Mystery / 大英図書館で展示中)



大英帝国博覧会の宣伝のため、世界をまわった広報チームメンバー。左からアガサの夫アーチー、博覧会主催者のアーネスト・ベルチャー、その秘書の男性、アガサ。© Maypm

アガサが生んだ愛すべき名探偵
ポアロ & ミス・マープル

エルキュール・ポアロ

卵頭にツンとはねたハの字ヒゲがトレードマークのベルギー人探偵、エルキュール・ポアロ (Hercule Poirot)。身長は 163 センチほどで小柄。チリひとつでも気にするほど、身だしなみにうるさい。初登場はアガサ・クリスティーの処女作「スタイルズ荘の怪事件」(1920 年)。最終作となる「カーテン」(1975 年) まで 33 の長編、54 の短編に登場。ベルギー警察の有能な警察官だったが、第一次世界大戦中に英国に亡命。以後、ロンドンで私立探偵として難事件を解決している。

相棒／ヘイスティングス大尉

元英陸軍の大尉。物語の語り手の役割で、素人的見地で読者の視点を代弁。コナン・ドイル著作の「シャーロック・ホームズ」シリーズに登場するワトソン博士のような存在。容疑者の言葉をすぐ鵜呑みにしたり、外見で判断 (美人に弱い) したりしがちだが、捜査が煮詰まった時にふと口にする言葉が、ポアロの推理に救いの手を差し伸べることが多い。

代表作

「スタイルズ荘の怪事件」(1920 年)
「アクロイド殺し」(1926 年)
「オリエント急行の殺人」(1934 年)
「ABC 殺人事件」(1935 年)
「ナイルに死す」(1937 年)



ミス・マープル

セント・メアリー・ミード村に暮らす、ガーデニングや編み物が趣味の英国人おばあちゃん探偵、ミス・マープル (Miss Marple)。ファーストネームはジェシー。「牧師館の殺人」(1930 年) から「スリーピング・マードー」(1976 年) まで 12 の長編、20 の短編に登場。アガサ・クリスティーの祖母がモデルという説がある。青い目にバラ色の頬をもつ上品な老婦人で経済的に自立しているものの、特別に裕福な暮らしをしているわけではない。

相棒／なし

特徴

どんな物的証拠も見逃さず、論理と経験をもとに推理するポアロに対し、ミス・マープルは女性的勘と、一見ただの世間話とともとれる巧みな聞き込みなどをもとに推理。人の感情の揺れや仕草の変化を見逃さない、優れた人間観察力を持つ。ただ、プロではなく「趣味」の延長線上で探偵業をこなす彼女の活躍ぶりは、警察にとって愉快なものではなく、煙たがられている。

代表作

「牧師館の殺人」(1930 年)
「書斎の死体」(1942 年)
「予告殺人」(1950 年)
「パディントン発 4 時 50 分」(1957 年)

